

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

| | |
|------------|---|
| Title | 國木田獨歩論 : 論説 |
| Author(s) | 坂本, 浩 |
| Citation | 龍南, 238 : 111 - 122 |
| Issue date | 1937-10-30 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/7427 |
| Right | |

ところ、上人は

既にとて出でたつ道も進まれずとどむる聲や關となるらむ

と答へ、死を恐れぬ、安心立命の悟りの不動を示し、とめてくれる人の言葉が却つて邪魔になつて、その志が越えにくい關ともなるであらう、とめだてなどして呉れるな、ヤカマシイぞウルサイとばかりに言ひ放つてゐるのである。だが上人の人間味はこの後句に十分出てゐるのである。とどむる聲が關となるであらう……といふところに泰時への一沫の温情、親しみが表はれてをり、冷徹一點張りでないといふ上人の性格の一面たる人間味が出てゐるのである。上句は技巧不熟の如くゴツ／＼した感じを表してゐるが、下句は實に調整のとれたなだらかな調子をなしてゐる。上人の作歌技法の非凡なことを知ることができる。

以上の贈答歌により、泰時から上人が如何に深く崇拜されてゐたかといふことが解るであらう。がしかし上人は胸中に勤皇の志堅く、火の如き心で大義明分を守つて、權勢を誇る執權職泰時を心中秘かに押へつけ睨みつけてゐたであらうことも、よく解せられるであらう。歌句の言葉のかげに躍動する複雑にして微妙なる精神を汲んでとり、その心理を味ふてみるところに、意義の深いものがあり、かつ歌の神秘幽玄さがわかると思ふ。

國木田獨歩論

坂 本 浩

常に流動しつゞけてやまない作家がある。初期と中期と後期とは殆んど別人ではないかと思はせる程變貌してゆく作家

がある。こんな作家は研究者にとつて好都合である。一見して別人の如く變貌してゐる各作品の裏を流れながら首尾一貫してゐる作家の肉体をつかめば、問題は簡単に解決出来る。あとは名刀の切れ味に鼻をうごめかせばそれでいい。こんな作家はコツをのみこめば料理はしやすいし、且その馳走も見事に作りあげることが出来るに思はれる。

殆ど靜止してゐる作家がある。どの作品を取上げてみても顔見知りの感を與へる。處女作の中にはその作家のすべてが含まれてゐるといふ尤もらしい言葉もこの場合はうまく當てはまる。かかる或意味に於て初めから完成されてゐる作家を論ずることは、これまたさう困難ではない。その代表作を嚴密な態度によつて解剖し、あらゆる方向から見點を向けて、その裏にひそむ秘密の秘密まで明るみに出してみせるとそれでいい。それが即ち作家の全身を解剖することになるとすれば、これは又何といふ經濟的な研究方法であることか。一刺にして急所をしとむる快も、この骨折りの報酬として與へられるであらう。

さて國木田獨歩はこの二つの型のいづれに屬する作家であらうか。

獨歩は初期・中期・後期とめざましい變貌をなしとげた作家であらうか。勿論獨歩とて人間である以上、年齢の増加の投げる影は必ずや作品に反映してゐる筈であるから、少しく神經質な目をもつてホヂくりかへせば、この作家の發展の跡をかくかに辿ることが出来るであらう。然しこれをもつて獨歩の變貌を主張するとすれば、空々しいペダンテイックな風が私達の胸に吹き込んでくるに違ひない。それほど獨歩といふ人は變化發展の少い人であつた。

では、獨歩は初めから完成された作家で、その全作品は、處女作乃至代表作によつて置換へられる底の作家であると言はれるであらうか。これは一層私達を躊躇させる問題である。一体どの作の中に獨歩のすべてが含まれてゐると言ふのだ。この作家は所謂代表作を指摘することの困難な人である。獨歩を靜止した作家だと斷定することは、獨歩を流動的作家だと斷定する以上に見えすいたコヂつけのやうに思はれてならぬ。

實に國木田獨歩は動きゆく作家に非ず、而も靜止せる作家に非ず。——ここに獨歩を論ずる上の困難が横たはつてゐる

のである。



國木田獨歩の秘密を開く鍵が二本ある。その一本は彼の失戀事件であり、他の一本は彼の病氣である。獨歩の作品を整理する上の困難さは、實に獨歩の精神並びに肉体に一大革命を與へたこの二つの動因、失戀と病氣にあることを此處で明確に記憶しておきたいと思ふ。

彼は言ふ。『戀は心の大きな革命なり。』又言ふ。『失戀は詩人の糧なり。然り、尊き糧なり。』と。

彼は他の所に書きつける。『余は昨夜癡然として悟れり。曰く、生や素より好し、されど死亦惡しからず。疾病は彼岸に到達する階段のみ。又吾生の一事たりと稽ふれば、別に煩悶するを要せず。』と。



◎第一の鍵、失戀。

人間の一生を支配する動因が失戀にあるなどと言つたら現代の青年は笑ひ出すかも知らない。然し、國木田獨歩にとつて、クリスチャンであり、良心的に誠實を重んじた彼にとつて、この失戀は私達の想像以上に大きな深い影響を與へてゐる。今暫く眼を彼の過去に向け、その人物に就いて考へてみる必要がある。

獨歩が洗禮をうけて熱心なクリスチャンとなつたのは十九歳（明治二十二年）のことであつた。清純な理想主義者であり、お坊ちゃん的詩人であつた若い獨歩に、激しい現實がテラ／＼とその横顔を見せ始めたのは、その後數年を経て彼が新聞記者となつた時からであつた。人生、宇宙、人類、人類、人類、義務、存亡、自然、美、永遠の生命、こんな美はしい言葉がやがて新聞、雜誌、應接、金錢等によつて置換へられようとしてゐる。この荒波の中にとすれば自己の眞姿を見失ひさうになる獨歩は、己の薄志弱行を鞭うちつづけ、或はエマーソンに、或はウアーズウオースに、或はカーライルに、そして聖書に助けを求め、「シンセリテイ」をもつて人間の眞に生きる唯一の道とし、之を殺さんとする社會感を、人間墮落の

最要件だと喝破した。しかし現實といふ冷酷きはまる怪物は、その位で征服される程御目出度くはないのだ。父の免職と家庭の貧困。パンとソールの問題が獨歩に脅威を與へ始めた。生活の資を求めんと豊後の佐伯に獨歩が行つたのが二十六年十月のことであつた。この南國の大自然の汚れなき風光が、彼の愛讀した自然詩人ウアーズウオースと融合して、獨歩の性格に清純な光輝を増加したことは人も知るところである。翌二十七年日清戦争が起つた。従軍記者としての獨歩の姿は軍艦千代田艦上に見られる。その時書かれた「愛弟通信」の好評を身に脊負ひつつ、青年記者獨歩は颯爽として故國へ凱旋した。その直ぐ眼前には、思ひも設けぬ百花爛漫たる花園が、香氣馥郁として待ちうけてゐようとは露知らずに……

現實と戦ひ、無信仰と争ひ、清純な一路を守り、誠實をこそ己の唯一の生活の基準と考へてきた青年獨歩であつた。眞劍であるだけに、生眞面目であるだけに、彼は戀愛の中にも誠實を求めた。魂と魂との純一な結合を求めた。互ひに互ひのすべてを捧げつくす献身的な愛情を求めた。だが悲しいことにそれらは果敢ない夢想として終らねばならなかつた。

「伊豆相模峯の白雪ふかけれどわがすむ庵は春雨の音」と歌はれた幸福も、翌年春までしか保たなかつたのである。二十九年四月、獨歩の愛妻は彼をすてて失踪して了つた。あらん限りの誠をこめて元の校へと努力したことも無駄な結末を見た。獨歩は狂氣のやうになつた。次いで獨歩は阿房のやうになつた。一生涯忘れることの出来ない大きな痛手が彼の和かな魂に荒々しい爪跡を残していつた。己の戀に己のすべてを賭してゐた獨歩は、かくてすべて以上のものを失はねばならなくされた。彼の信仰、彼の誠實、彼の理想主義。

ものの見事に脊負投げを喰つた。辛うじて起き上つてみれば、周圍は全く一變して彼の目に映じてきた。露國のある哲學者のいふ「悲劇の哲學」はまさにこの時の獨歩に開眼されたのだ。だが獨歩はそれでも生きたかつた。起上つたからには生活がしたかつた。過去のすべてを失つた男が生命を續けようとするには何かを食はねばならぬ。獨歩は斯くして文學に大口をあけて迫つていつた。「斷手文學界に突入せんと欲す。」「われは詩人たるべし。これ吾が運命なり。あへて天職といはず。」獨歩をそれまで導いてきた神は、彼をして文學者たるの運命を與へんとて、かくも殘酷な失戀を選び給ふたの

か。知らず。獨歩は女にふられて目が開いた。開いた目で文學の世界を覗き込んだ。恐ろしい痛手は益々彼をして文學に専進せしめた。實に文學こそ失戀を忘れんとする睡眠藥であり、その完成こそ自分をすていつた女への復讐ともなるのだ。かかる時、彼の作品の秘密を解く鍵が一本此處にあると言ふのは些かもユデつけではない。

◇ ○失戀が與へた影響。

- | | |
|---------------------|-------|
| (一) 絶望、苦惱 | 消極的方面 |
| (二) 自嘲、冷笑 | |
| (三) 自然への逃避 | |
| (四) 少年の日の追憶 | |
| (五) 敗殘者への同感 | |
| (六) 女性觀の變遷 | |
| (七) 苦惱より浮かび出んとする努力 | |
| (八) 道德の建設 | |
| (九) 驚きを欲する心 | |
| (十) 宇宙の神秘に直接觸れんとする願 | |

積極的方面

◇ (一) 絶望、苦惱。失戀の痛手を負つたものが、ことに最愛の妻に逃げられた男が、死を思ふ程の苦悶にさいなまれるのは多言を要しなくとも知る人は知らう。獨歩にあつてはこの苦悶は歌はれる時期に訪れてきた。己の夢を、己の憧憬を、そして己の喜びを歌ふことのおまりにも短かつたが故に、彼の詩歌は殆どすべて彼の心の苦惱の溜息となつた。例へば「絶望」の一篇を見よ。

(二) 自嘲、冷笑。自分を敝履の如く棄て去つた妻、而もその原因すらどうしても分らず、我身を貧乏書生と反省し、

變屈人と呼ぶ獨歩にあつて、失戀の苦悶は外部にはけ口を見出し得ないで、内部へ内部へと侵してゆく。かかる時奎められた口元には冷笑が浮かび、自分の顔に唾でも吐きかけて馬鹿ツ馬鹿ツと嘲りたくなるのも自然であらう。試みに「小春」を見よ。眞の春ならぬ、眼前にはすぐ冬をひかへた秋のなま温い感觸が、獨歩の心境を想はせて呉れるであらう。

(三)自然への逃避。失戀の痛手を慰める唯一のものは實に自然の温い腕である。藤村はその時頭を刺つて旅へ出た。花袋はその時山の林の中に身を横たへて泣いた。多感な明治の青年の思ひつめた行動は、下宿の床の中でアダリンでごまかす現代青年からは遙か彼方にある。而も人一倍感じやすかつた獨歩であつた。大自然が彼の心の姿として描かれようとの不思議があらう。「武藏野」は決して東京近郊にはない、彼の心の中にある。「忘れえぬ人々」の背景をなす諸所の風光、「郊外」の中の郊外の點描、「空知川の岸邊」に於ける北海道の大森林を忍びやかに過ぎゆく時雨。これらの景の奥底には獨歩の苦い^{にが}すゝり泣きの聲が聞えてゐる。

(四) 少年の日の追憶。目前の苦惱が身をきりきざむ時、人の心は過去へ飛ぶ。どす黒い血液のあふれ出る傷口を見ると、何にも知らなかつた幼い頃の純眞な夢を人は愛惜するものだ。「鹿狩」、「畫の悲しみ」、「少年の悲哀」、「山の力」、これらの實にすぐれた作品を生み出す母胎は此處にある。

(五) 敗殘者への同感。獨歩は何故に渠（「まぼろし」）を描いたのだらう。何故に大河今藏（「酒中日記」）の如きに自己の半身を見出したであらう。獨歩は何が故に富岡先生（「富岡先生」）や加藤男爵（「號外」）にあればどの愛着を感じたのであらう。彼の全作品中でも白眉とも稱すべきかゝる人物を生み出すことは、敗殘者の心をもつて心とする作家以外には不可能である。而も、世の所謂敗殘者であらうとも、俗臭に滿ちたる浮世に土で作りあげたやうな虚名を誇る俗物どもより、これらの人物は遙かに高潔であると肯定する作家を除いては書けないところである。實に獨歩にあつて、己のすべてを賭した戀に破れることは、世に敗殘することゝ何じであつたのである。

(六) 女性觀の變遷。自分の戀人を女神のやうに崇め尊んでゐた青年詩人が、コツビどくその戀人にふられた。あまり

にも純潔すぎた獨歩であつたればこそ、自分の生活信條とする誠實をものゝ見事に踏みちつて妻が姿をかくして永久に歸つて來ない日の訪れた時、初めて獨歩の澄みわたつた目には女性のありのまゝの姿が醜くうつゝたのだ。「鎌倉夫人」や「第三者」に見らるゝ女性へ對する批判を見よ。更に又「正直者」や「女難」を特徴づけてゐる肉慾描寫を見よ。女といふものは人間の眞似をして活きる禽獸であり、戀愛といふものは畢竟性慾の御化粧に過ぎないといふ獨歩の喝破が此處にきかれるのである。彼にかゝる開眼を許したものは、實に結果より見て寧ろ感謝すべき獨歩の戀人の存在であつた、そして又そのすばらしい破壊作用であつた。

以上の六つを私は『消極的方面』と呼ぶ。これこそ國木田獨歩が我が國の自然主義の直接の母胎となつた方面である。

(七) 苦惱より浮かび出んとする努力。獨歩の詩歌時代は失戀の苦悶の眞中に訪れて來たが故に、彼の詩は多くその苦惱を歌つたものであつた。然し獨歩にあつては、その「絶望」は「嬉しき祈」にまで發展していつてゐる。苦惱がそのまゝ苦惱として終らないで、苦惱が宗教と結合する時、憎みは變じてより高められた愛となるのだ。已をすてた憎い女のために心からその幸福を祈つてやらうとする彼の心情。キリスト教に培はれた獨歩の血を見るべきである。つゞいて作られた小説「おとづれ」には、客觀化によつて自分の苦惱を手術しようとした彼の痛ましい失敗の跡が見られ、「歸去來」の最後には苦悶の唯中より戰闘を誓つて立上る彼の叫びが聞かれるのである。

(八) 道德の建設。『文學の効用は「一に教、二に慰」とは彼の信念であり、文學をもつて天下の師表たらんとは彼の大望であつた。極言すれば最高の文學とは道德モラルの書となるのである。「夫婦」といふ作品はどうしてもうまく調和しない夫婦間の問題を取上げたものであるが、作者獨歩は主人公をして、積極的に意力・智力・情熱を用ひてそれを完全に發達させるのが人の責任であり、夫婦の面白味も其處に生れてくるのだ——といふ意味を言はしめてゐる。

(九) 驚きを欲する心。これに就いては多言を要することもあるまい。「牛肉と馬鈴薯」に端的に物語られてゐる處だ。自分を取りまくすべてを投げすてて子供のやうな心をもつて驚きたい。單純に素直にありのまゝに對して驚歎したい。辛い人生の經驗は獨歩からこの柔軟な心を奪つてしまつた。然し惱みつつ、求めつつ、與へられないで失望しつつ、尙進んでゆきたいと努める彼にあつて、この驚くことの出来る幼い魂こそ完璧なものと思へたのだ。

(十) 宇宙の神秘に直接に觸れんとする願。當時の文學者が多く自然の表面的現象のみを觀察したのに對して、獨歩は現象の裏に潛み流れる或ものを直接にとらへんとした。友人の死にゆく様を目で明かに見ながらも、獨歩はそこに「死といふ幻影」を見たので、「死そのもの」を見たのではないと覺つた時、宇宙の背後にあるものと一皮隔てられてゐる自分をもどかしく感じてゐる。(「死」)。何もかも慣習化され、魂を忘れた脱殻（なげかり）のみになつてゐる宗教。創始者の眞理はいつの間にか時代と人々との情力によつて虚偽にまでぬりかへられてしまつてゐる。神と人とを隔ててゐるこの宗教の壁を打破いて、眞實の神を求めようと彼は肉迫するのである。(「惡魔」)。

以上の四つを私は積極的方面と呼ぶ。これが獨歩の所謂自然主義者と異つた所以であり、獨歩の世の宗教家と考を別にする所以であり、獨歩の獨歩たる所以である。そしてこれこそ後の理想主義文學へ遙かに一脈の糸をひく點である。

○運命觀

第一の鍵、失戀は獨歩を玉碎した。それは急激であつただけにバツと火花を發つて碎けとんだ。八大傳ならぬ十個の玉が光つて散らばつた。私は今その十個を拾ひあげてみた。これらの玉はも早何らかの統一をもつことは出来ないものであらうか。所詮碎けた玉はかけら以上のものではないであらう。然しこの十個のかけらを代表するとも言ふべき今一個の大きな玉が残つてゐる。それは「運命觀」である。これは玉碎された獨歩の人生觀であり宇宙觀でもあつたのだ。

十個の玉のいはば統一されたものがこの運命觀であつてみれば、そこには當然消極的方面と同時に積極的方面も含まれてゐる筈だ。然り、獨歩の運命觀は自然主義者のいふ宿命とは同じではない。運命觀の中には絶望と共に喜悅が存在してゐる。唯消極的方面のみを考へに入れて宿命を信ずるとすれば、飛んでも踏ねてもその執拗な裏外に脱することを許してくれない自然は、人間にとつてその自由を束縛する仇敵以外のものではあり得ない。自然主義者は「自然に歸れ」てふ叫びをその出發點にもつてゐながら、自然に反抗ばかりしつづけてきた。自然は彼等にとつて打克つべからべる脅威となつて現れてきた。人は遂にあきらめを見出し宿命の前にうなだれた。獨歩の傑作の一つ「運命論者」はまさしく之である。けれど此處で注意せねばならぬことは、獨歩の人生觀たる運命觀は決してそのまゝ、「運命論者」ではないといふ一事だ。

「運命論者」はその消極的方面のみを誇張した「宿命論者」に外ならぬ。獨歩の運命觀の中には宿命と並んで積極的方面が輝いてゐる。彼の考へによれば、人間といふものは社會の中に齟齬として生活すべきものではなくて、宇宙・大自然の神秘な息吹に觸れつつ生活すべきものである。人をその懷内にとらへて動かさない自然は、妙なことにそのとらへた人間と一脈の血のつながりをもつてゐる。人が心を虚しくしてこの神秘的結合によつて神の聲に聞き惚れる時、人は永遠の生命を獲得して大歡喜を味ふことが出来るのだ。獨歩が幼兒の如き柔軟な心をもつて宇宙の神秘に觸れて驚歎したいと願つたのは此の故である。恐れつつも愛せずにはゐられない、苦しみつつも歡喜を覺えずにはゐられない、これは論理的にいへば矛盾であらう。けれど宗教の世界に於ては之は同一物の表と裏である。若しそれ獨歩の運命觀にかゝる積極的方面をかいでゐて、獨歩即大河とするならば、彼は「運命論者」を書くよりも自らピストルを用ひる方が自然であらう。このやうな傑れた作品を生む内的生命力を獨歩がもつてゐたといふ事實そのものが、獨歩の肯定的・積極的一面の存在を證明するものである。

若い頃のあの意志的・理想主義的な獨歩に失戀（第一の鍵）が下カンときた。激しい精神上の革命を経て、ともすれば消極的に走らうとする獨歩に、彼の本質は力強く明るく生き續けてゐた。そして消極的方面を積極的方面が常に支持しつ

つ、彼の人生觀たる「運命觀」を形成したのであつた。



◎第二の鍵、病氣。

己の眞實に生きぬきたいと努める作家にあつて、彼をして一點に安定することを不可能にし、脱皮につぐ脱皮をもつて流動せしめずにはおかないものは、實にその作家の内面に横たはる矛盾葛藤である。眞の意味に於ける文學的歩みの發展は、相反する二つのものの内部的統一によつてのみ果されるのである。國木田獨歩に於ても、失戀の結果殆ど收拾出来ない程に分裂せしめられた彼の内面も、時の経過によつて次第に二つの相反するものに凝結されていつた。それこそ私が今まで言葉をつくしてきた如く、獨歩の人生觀としての運命觀の兩面、消極的方面と積極的方面の二つである。然らばこれらの相對立し相矛盾する内部的眞實は、獨歩に如何なる文學的發展を促し、獨歩をして如何なる方向へ流動せしめていつたであらうか。これに對する答案は既にこの一文の最初に與へられてゐる。「獨歩は流動的作家に非ず」と。それなら一体何故にこの内面的矛盾葛藤は彼の文學的歩みの上に發展をもたらさなかつたか、換言すれば、獨歩の内面にあつて消極的方面に常に刺戟を與へてゐたあの好ましい積極的方面は何故に力を失つていつたか。ここに開かるべき第二の秘密がある筈だ。私はその第二の鍵として彼の病氣を考へたい。

獨歩自ら語つて言ふ。「僕の病氣の原因はと云へば、獨歩社の解散からさ。誰をも恨むことはないが、柄にないことをやつたからだ。自分の作と云へば、一つも出來ず、つまり煩悶を酒に遣ると云ふ風だつたから……」獨歩社が芝の櫻田本郷町に起されたのは明治卅九年八月。彼の死の一年半前であつた。そしてそれは翌四十年四月遂に破産の憂目を見た。獨歩の痛ましい病氣の原因はそこから生れた。この病があゝの負けじ魂の獨歩をも如何に苦しめたか、おそらく私達の想像以上であらう。獨歩社の起された直後の一書簡に、「僕は衰へたよ。まるで骨と皮になつたよ。君が見たらびつくりするぞ、ひいき目なしに見て「長くはあるまい」が適評ならん。」(小杉未醒氏宛)と書き送つてゐる。病勢いよ／＼つのつた

獨歩は四十年六月相州湯ヶ原に轉地し、七月辛うじて歸京したが、十一月には再び常陸國湊町の杉田氏の別莊に赴きて病を養つた。「此海濱で動けなくなるのはイヤに候只今でも八度以上の熱なり、午後には九度以上になるべし」と妻へ書き送つたのはこの湊町時代であつた。

こんな病勢の中にも獨歩は創作の筆を止めなかつた。けれどそれは病氣前の諸作に比すれば明かに一變化をきたしてゐる。既に見てきた如く、それ以前の諸作には消極的方面と積極的方面が相争ひ、相矛盾しあひ、如何に暗い中にもどこことなく一脈の明るさが貫き流れてゐた。彼の人生觀の中には宿命と並んで明るい肯定が微笑んでゐた。それが發病後の作品になると、そんな力強い心構へが見えなくなつてきた。人生の諸問題に眞正面から取組む代りに、獨歩は人生の一隅に靜かに正坐しつゝ人間どもの營みをデツと見つめてゐる。冷やかな、そして又温かな微笑みと哀愁との溢れたあの目をもつて……。彼の目に映る世界は人情の世界である。ユーモアとベールとの入れまじつた泣き笑ひの世界である。

釣に行つて日が暮れても歸つて來ない子供を心配する母親の心を描いた「泣き笑ひ」。風采のあがらぬ洋畫家の姿を寫し、花袋をしてチエホフの壘を摩すと絶讃せしめた「肱の侮辱」。一下等勞働者がどうにも斯うにもやりきれなくなつて倒れる経過を書いた「窮死」。思ひ出のボスさんがチエホフの短篇と聯想されてその死をいたむ氣持のあふれた「都の友へ、B生より」。これらの作品は悉くユーモアとベールとの交錯した世界を描いたものである。あの露西亞の作家チエホフの短篇の如く……。



病勢は更に悪化していつた。獨歩の心境は更に深まつていつた。寂びた、枯淡な、圓熟を越えて老境に入つた。好惡もなく、道德的判斷もなく、人物の偏重もなく、唯水の流るる如き境地。靜かに澄んだ彼の瞳には人間の世界が藝術的に純化されてアリ／＼と映る。彼はそれを寫す。生れるものは心にくい程究壁な客觀描寫。作者の血液や体臭や感情など露ほどもない、コチコチした、澁い、くすんだ現實そのもの。

四十年十二月湊町より歸京して執筆し、そのために彼の生命を短縮せしめたと言はるる傑作「竹の木戸」を見よ。二老人、石井翁と河田翁に具象化された荒涼たる人生觀、彼の多くの短篇中でも老熟の境地に達せりと評せらるる「二老人」を見よ。更に彼の作中白眉との定評ある絶筆、彼の藝術の極北であり、人としての彼の最後を物語る「渚」を見よ。

明治四十一年二月、相州茅ヶ崎南湖院に入つた獨歩は、六月眞山青果氏宛、「僕は遂に咯血した、今夜來ても面會謝絶だそうだ」と書いた。その月の二十三日、友人達にかこまれながら國木田獨歩は逝いた。齡三十八歳。

此處で私が最初に書きつけた獨歩の死生觀に歸つてゆかう。死生一如ともいふべき彼の境地を再び考へてみよう。そしてこの最後の三四の作品が、これから男盛りとして活動しようといふ三十代の青年によつて書かれたものであるといふ一事に思ひを馳せよう。かかる時、私の言はうとした第二の鍵、獨歩から積極性を奪ひ、次第に彼をして靜觀から諦視の境地にまで追込んでいつた病氣の意味が明瞭になつてくるであらう。(一九三七・七・二五・)

一九三四年七、八月同人雜誌「攷」に一度發表したものであるが、委員の度々のお求めにより舊稿を改めてここに再發表した次第である。(著者)